

明治大学農学部研究報告 第65巻－第2号 (2015) 43～44

〔研究室紹介〕

ドイツ語研究室 German Studies

辻 朋 季
Tomoki TSUJI

当研究室では、日本とドイツの文化交流史を、近代西洋の植民地主義の影響を踏まえて捉え直す、という研究を行っています。その中でも近年特に興味を持って取り組んでいる課題が二つあります。一つは、ドイツにおける日本学（Japanologie）の成立史を明らかにしながら初期の日本学者の研究姿勢を探ること、もう一つは沖縄県宮古島の「ドイツ皇帝博愛記念碑」をめぐる史実と言説の再検証を出発点に、沖縄とドイツの文化交流史にまつわる様々な事象を解明することです。このうち二つ目のテーマについては、既に本誌第64号-4に掲載の拙稿「宮古島「ドイツ皇帝博愛記念碑」を複眼的に捉え直す：宮古島郷土史、ドイツ植民地史の研究成果に立脚して」でも紹介しているため、ここでは一つ目の課題である、ドイツの日本学をめぐるメタレベルの研究について、概要を紹介したいと思います。

ドイツにおける日本学の歴史を語る上で欠かせない研究者の一人に、「ドイツにおける日本学の創始者」あるいは「日本における独文学の父」と称される、カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）の名前が挙げられます。このフローレンツの研究業績の中身や、講演等での発言内容を批判的に分析しながら、彼が日本研究に臨む際に意識下に宿していた西洋中心主義的態度、自国文化中心的な視線を明らかにする、というのが具体的な課題です。

フローレンツは、ライプツィヒ大学でサンスクリット語を研究して博士号を取得した後、ベルリンに1887年に開校した「東洋語学校」（Seminar für Orientalische Sprachen）という、主に外交官や植民地官吏の語学教育を目的とした学校で日本語を本格的に学び

始めます。そして日本研究をさらに深めるため1888年に来日し、翌1889年に東京帝国大学の講師に、1891年には独文科と博言語（比較言語）科の教授に就任し、1914年の帰国までの25年間ここで教鞭を取りました。この間に、藤代禎輔、登張信一郎、小宮豊隆、木村謹治など、日本のドイツ文学研究の基礎を確立した著名な研究者を育てたほか、近代国語学を確立した上田萬年などにも影響を与えました。さらに自身の専門である日本の古代史や古典文学、文学史の研究にも旺盛に取り組み、ドイツ語で書かれた初の通史的な日本文学研究書 *Geschichte der japanischen Litteratur*（『日本文学史』、1906年）などの著作を発表しており、その多岐にわたる活動が高く評価されています。

その一方で、フローレンツの日本での活動や研究姿勢に対し、いくつかの疑問点も浮かび上がります。例えば日本研究を生業とする彼が、なぜ専門ではないドイツ文学の教授として振舞うことができたのか、という点です。彼は1914年まで東京帝国大学の独文学教授を務めましたが、この間にドイツ文学研究の分野で目立った研究業績を挙げることはなく、専ら日本研究に打ち込んでいます。つまり、肩書きから言えば本業であるはずのドイツ文学を「片手間で」教えつつ、実際には日本研究をライフワークにしていたわけです。しかもその日本研究においても、フローレンツは、独文科の学生を万葉集の講義に出席させてその内容をドイツ語で報告させたり、彼らに日本文学に関するテーマを卒業論文の課題として与えたりしており、その研究の進め方には大いに批判の余地があると言えます。

しかしこうした事実以上に問題だと思われるのは、フローレンツが、ドイツの人文科学の基礎を習得して



写真1 フローレンツが帰国後、ドイツ初の日本学正教授に就任した「ハンブルク植民地研究所」(Hamburgisches Kolonialinstitut)の建物（現在はハンブルク大学）。第一次世界大戦後に大学に昇格しました。

いることから生じる知の特権性を自認し、それを利用することで、日本研究の分野で多数の業績を挙げ、先駆的な研究者としての地位を確立しようとしたこと、言い換えれば、日本に関する知的な支配を目指していたのではないか、という点です。日本の独文学の歴史を研究している高田里恵子氏は、独文学者としてのフローレンツの活動を「横のものを縦にする」仕事、つまりドイツ文学の基盤を日本にそのまま移植することだったと捉えています。これを彼の日本研究に当てはめるなら、彼は日本の国文学者が行ってきた「縦のもの」を、西洋の理論や方法論に基づいて「横のもの」に書き直すことにより、西洋文化圏出身の日本研究者としての自らの立場を確立していったとも言えるのではないのでしょうか。

こうしたフローレンツの無意識の優越意識は、1895年に国語学者の上田萬年との間で起こった翻訳論争において表面化します。1894年に出版された翻訳詩集 *Dichtergrüße aus dem Osten: Japanische Dichtungen*（『東方からの詩人たちの挨拶—日本の詩歌』）において、彼が日本の短歌や俳句をドイツの抒情詩の形式に改変し翻訳したことに對し、上田は「これでは原作者が可哀想だ」と苦言を呈します。これが端緒となり、計5回に及ぶ議論の応酬が1895年に『帝国文学』誌上で繰り広げられましたが、その際フローレンツは、西洋の文学理論とその優位性に固執して、自らの立場の正当性を訴えました。上田からの批

判を受け付けようとしなない彼は、西洋で無名の日本の詩歌を自分がドイツに紹介してやったのだ、とか、自分が抒情詩の形式に改変して翻訳したことで、本来ヨーロッパでは価値を認められないような短句形式の日本の詩歌が評価されたのだ、と述べて、次第に彼の意識下に潜んでいた西洋中心主義的態度、自己優越意識を露呈させていきました。

もちろん、当時の日独の間に（ヨーロッパを基準とした場合の）学術水準の大きな差があった点を考慮すれば、フローレンツが日本で特権的立場を享受できたこと自体が問題になるわけではないとの見方も可能で、すし、西洋文化の優位性を当然の前提とするような植民地主義的な価値観が優勢だった当時の状況に鑑みれば、フローレンツ個人の姿勢だけを糾弾するのは適切ではない、とも言えるでしょう。それでもやはり、フローレンツには、日本で獲得した視野をもとにドイツ文学を新たに解釈したり、上田の批判を自らの西洋中心の価値観を相対化する契機と捉えたりすることが可能だったのではないかと、との疑問が拭えません。今後の研究では、この点をさらに掘り下げ、異文化を研究するという知的営為に内在する問題として一般化して論じていきたいと思っています。

学術に携わる研究者の多くは、未開拓の研究分野を前にすると、どうしても他人に先んじてその分野を究め、より多くの知見を得たいと考えがちです。とは言え研究対象が異文化に向けられる場合には、その研究が自らの価値規範を他者に押し付けるものとならないように、むしろ自己の立場を反省的に捉え直す契機とし、優劣では語れない文化の複数性・多様性への意識を喚起するものにすることが大切だと考えています。そのことを理屈ではわかっているても実践することは困難であり、往々にして意識下で文化を序列化してしまうという他者認識の問題性を、フローレンツの日本研究は例示していると言えるでしょう。

参考文献

- 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』。春秋社。東京。1995。
高田里恵子『失われたものを数えて：書物愛憎』。河出書房新社。東京。2011。